

令和5年度 結果の分析及び今後の改善策(案)

(中間・最終)

呉中央中学校区 校番13 呉中央中学校

重点	d 中期(3年間)経営目標	e 短期(今年度)経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
***	③ 生き生き根っこを育てる「豊かな学び」の創造	③ 「主体的、対話的で深い学び」の実現と基礎・基本の定着を図る。	教科の学習について、「授業で思考し表現している」生徒の割合は89%であり、目標の90%に近い数値となった。7月のアンケートでは学年ごとの差が大きかったが、12月の結果を見ると学年ごとの差が小さくなっており、指導の成果が現れていると考えられる。 「学力調査・定期試験(国・数・英)における通過率30%未満の生徒の割合」は13%で、9%以下という目標を達成できなかった。Qubena等ICTの活用効果は見られるものの、全国学力・学習状況調査には対応できていない。 「各学年の家庭学習目標時間の達成率」の割合は55%で、目標を10ポイント下回った。7月は試験週間の中でのアンケートだったため数値が高かったものと考えられる。	アンケートの結果から、日々の授業の中で、生徒が「思考」「表現」する活動を仕組んだ成果が現れているものと考えられる。来年度に向けては、ロイロノートをはじめとするICTを効果的に活用することで、思考力・表現力のさらなる向上に繋げていきたい。 基礎学力の定着に向けては、授業の充実とともに、Qubenaを活用した放課後学習や、少人数での補充学習などを引き続き行っていきたい。また、検証方法が適切であったか、見直しも含めて検討していきたい。 家庭学習については、試験週間だけでなく平常時についても学習習慣の定着が図れるような取組をしていきたい。
**	③ 生き生き根っこを育てる「豊かな生き方」の創造	③ 「自己指導能力」を高める。	生徒による振り返りでは、「自分には良いところがある」86%、「安心できる居場所がある」96%、「先生に相談できる」88%とアンケートで肯定的な評価をした生徒はどの項目においても前回よりも増加している。通常開催となった文化祭をはじめとした諸行事での各人の活躍の場が増えたことや個人面談を増やし、教員とのコミュニケーション機会を増加させたことによる成果と考えられる。 「あいさつ」「返事」「時間」「掃除」に関するアンケートに肯定的な評価をした生徒の割合は95%で、こちらも前回よりも割合は増加しており、生徒自身の意識は向上したと考えられる。2回の掃除ガイダンスや掃除評価の見直し等、取り組みにおける成果と考える一方、掃除に対して不十分な意識の生徒も一部見られるので、さらなる意識向上や質にこだわった形づくりが必要と考える。	生徒の意見を聞き入れながら「生徒指導規定」の見直しを図るなど「生徒主体」の学校づくりをいっそう進める。また、部活動体験などの本校の特性を活かした「小中連携」の取り組みを生徒会主体で行い、学校文化の定着を図る。月2回の面談機会を確保し、教員による助言や生徒による相談がスムーズに行える学校づくりに取り組む。 「あいさつ」「返事」「掃除」については、取組が不十分な生徒への指導の継続はもちろん、頑張った生徒を評価する制度を設ける予定である。生徒が主体的に取り組むしかけを生徒会中心に作っていききたい。
*	③ 生き生き根っこを育てる「しなやかな体」の育成	③ 基本的生活習慣の定着と体力・運動能力の向上を図る。	前年度よりも記録が伸びた生徒は、50m走では、男子88%、女子76%、20mシャトルランでは、男子98%、女子82%であった。コロナ禍による運動機会減少の影響はあまり感じられなくなった。女子は例年よりも運動部加入率(61%)が高いことも影響している。目標値は大幅に超えることはできたが、全国平均との比較では、当該種目で男女とも下回っており、7学年時よりもその差が広がっている。 遅刻については、明確な理由なく複数回繰り返した生徒の人数が7年生10人、8年生8人、9年生20人であった。一部の生徒が繰り返し遅刻をしている傾向がみられ、「遅刻」に対する意識の薄さを感じられる。	昼休憩のボール貸し出しやクラスマッチの実施など、運動に親しむ機会を増やすとともに体育授業や部活動においても運動の強度を意識し、引き続き走力を高める運動を継続的に取り組む。 従来通り、学校としての指導は継続し、遅刻をなくすためには「保護者」の協力が必須であることから、保護者連携は行っていく。それに加えて「遅刻」はなぜいけないのか、生徒自身に考えさせ、どうすべきかを感得させる機会を設けることを考えている。
	③ 業務改善を進め、元気で明るい職場を実現する	③ 生徒と向き合う時間を確保する。 ③ 長時間勤務の縮減を図る。	生徒と向き合う時間の確保は目標値に近づいてはいるが、昨年度よりも確保できていない教員が多い。昨年度より教職員数が減少していることも原因の一つと考えられる。 時間外勤務が45時間以下の教職員の割合は、月ごとの状況を見ると中間以降さらに増加しており、呼びかけの効果がみられ、目標の達成には至らなかった。	生徒と向き合う時間が確保できない原因として、コロナが明けて取組や行事の復活による内容の見直しと繰り返しに時間がかかっていることや、本務者の代員がつかなかったことによる仕事量の増加が考えられる。 仕事の偏りによる長時間勤務者が固定化しているので、仕事の分散化を図り、職員全体が計画的かつ効率的に仕事を行えるよう仕組んでいく必要がある。